

悩み・苦痛の逆療法

第1部 解脱の真理の発見

(15) アダムとイブの禁断の木の実は人類の不幸の始まりか

旧約聖書に書いてあるアダムとイブの話は、極めて象徴的なものである。神が創造した最初の人間アダムとその妻イブが、神の戒めを破って、知恵が授かる禁断の木の実のリンゴを食べたために、知恵は持ったが、楽園であるエデンの園から追放されて、様々な不幸に遭遇するという話である。

知恵は他の動物と人間を区別する大きな特徴であるが、プラスにもマイナスにも働く。文明・文化を築いたのは、知恵である。しかし、心の問題に知恵を働かすと、心の葛藤を生じて煩惱を深める。この知恵は、夏目漱石が小説『門』でいうところの「分別」に相当するのである。動物には、このような知恵はない。人間は、文明・文化の恩恵は受けたが、心の葛藤の不幸も大きい。総合してみても、人間は、他の動物と比べて、不幸なのか幸福なのかは、難しい判断であるが、聖書では、「アダムとイブ」の話にあるように、人間は知恵の実を食べて不幸が始まったと言っているのである。

しかし、文明・文化の創造・発展には「知恵」を働かせ、心の問題には「知恵」を働かさずに、苦痛を噛みしめ味わい更には強めるという使い分けはできるのである。そうすれば、人間は、真の幸福を得られるのである。

そして、人間がもっとも人間らしいのは、知恵があるからであり、考えることができるからなのである。パスカルは「人間は考える葦」であると言った。それは、大宇宙から見たら人間は取るに足らない葦みたいな存在である。しかし、パスカルは、「人間はその大宇宙を考えることができる葦なのである。」とも言っている。また、デカルトも「すべてを疑っても、考えている自分は疑いようがない。我思う。故に我あり。」と言っている。知恵の働きである「考える」「思う」ということは、人間の特質なのであり、そこに人間の存在価値があるのである。

これと似たことは、仏教でも言っている。すなわち、あらゆる存在は、心の最深部（阿頼耶識）が造り出したものにすぎない。実在しているように見える事物や感覚や思考は、心の最深部の阿頼耶識によって生じるものである。これは、また、釈迦よりずっと後の近世のヘーゲル等のドイツ観念論の唯心論とも相似している。古今東西を通じて、人間には心があり、考えることができることが、他の生物と違って、すべての事物や心は認識を通じて存在するのであると言っている。

私達が煩悩に苦悩することをこの認識論に当てはめると、次のようになるのである。煩悩の原因は様々なものがあって、病気・欲望・災害・解雇・降格・いじめ・貧乏等々である。そして、その結果として、煩悩という苦痛が生じるのである。しかし、これらの原因の存在も、その結果としての煩悩も、我々の心の認識を通して初めて存在するのである。これは、前述の認識論と同じである。煩悩は我々を大いに苦しめるので、煩悩の原因とか、煩悩それ自体が、客観的に確固として存在しているように思えるが、煩悩は認識を通じた主観的な存在なのである。

なお、誤解を避けるために述べておくが、一般的に前述の認識論は、私が信奉している唯物論とは相容れないと言われることが多い。しかし、私はそうは思わない。脳という物質の働きとしての認識というように理解すれば、何ら矛盾は起こさないのである。

人間が知恵を持ったことは、心の問題に関しては不幸の始まりであったが、人間が煩悩を解脱できるのも、やはり知恵によるのである。すなわち、煩悩の苦痛をしっかりと意識して、苦痛を噛みしめ味わい更には強めるということは、知恵があるからできるのである。

これを短歌にすると、

禁断の 知恵の木の実は 使いよう
心に使わず 暮らしに使う

となる。